

冬は必ず春となる

校長 松本 雅史

本年度もいよいよ最後の週となりました。1～5年生は今日を入れて後3日、6年生は4日となりました。先週、桜の花が咲き始めました。木々の芽もだんだん大きくなって「春をきましたよ」と、教えてくれています。

先生が、大切にしている言葉の一つに「冬は必ず春となる」というものがあります。実に当たり前のことです。でも、本当に冬の寒いときには、この状態から暖かい春になるなんてとても信じられないという気持ちにもなるものです。でも、必ずなるのです。信じようが、信じまいが、それが自然の理ですから、必ずそうなるのです。実は、この「冬」というのは、人が生きていく上での「困難」や「苦しさ」のことをいっています。本当に苦しい時は、その苦しさが終わりのないものに思える時があります。「もう終わった」「もうだめだ」と思うようなことに会うときもあるでしょう。でも、それでも必ず「春」はくる、それを確信して希望をもって進もうと前向きに挑戦を始める時、物事はいい方向へ向かっていきます。

先週、6年生が書いている卒業文集の原稿を読ませていただきました。移動教室や運動会、連合音楽会といった様々な思い出が綴られる中で、この6年間で自分がどれほど成長してきたか振り返る内容も多かったです。「もうだめだ、やめてしまおう」という弱い自分をどう乗り越えてきたかを熱く語る言葉の数々に、読んでいて胸が熱くなりました。そうした文章の中で、こんな言葉と出会いました。

「『やりたい』か『やりたくない』かを聞いているのに『できる』か『できない』かで答えるなんておかしい。最初から自分でできるものを選んでいたら何も始まらない」

この6年生は、この言葉に励まされ、挑戦を続けることができ、挑戦そのものが楽しくなると語っています。

みんなもこの1年間、様々な挑戦をしてきたことでしょう。そうした一つ一つの積み重ねが、賢く、強く、優しい、人としての豊かさを育みます。残された日々はわずかです。しかしそれは、次のスタートへの助走でもあります。この1年を振り返るとともに、次の学年では、中学校では、こんな自分になっていくぞ！これを頑張るぞ！と次のスタートを力強く踏み出す心の準備をしましょう。そして、今の仲間たちとの絆をさらに深める一日一日としてまいりましょう。

これで今朝のお話は終わります。